その四　神戸

晴れた日には淡路島はもちろん四国、大阪、遠くは紀伊水道まで見渡せる神戸の山手の街はいいところ。しかし、バスに乗らなければ行けないほど高いところには団地があって景観が一転する。その少し手前に大きな教会がある。クリスマス間近の朝、その教会へ仕事の下調べに来た。

青年部の西海知秋（ニシウミチアキ）に案内されて礼拝堂に入る。広さはもちろん天井の高さに圧倒される。小学校の講堂ぐらいはある。おまけにステンドグラスが側壁を彩っていて明るい。それもその筈、ステンドグラスの下に照明装置が設置されている。

一段高い説教台の左に金色（コンジキ）のパイプオルガンがあって、その手前で純白の襟と袖口を除いて真っ黒な教会服をまとった五、六十人の男女が賛美歌の練習をしている。天窓は黒いカーテンが引かれていてその分ステンドグラスが眩しい。ここで西海にリクエストする。

「ステンドグラスを暗くして、皆さんにキャンドルを持っていただけますせんか」

歌声が止まり、統制を逃れた声が礼拝堂に広がる。キャンドルが灯るとステンドグラスが暗くなる。明るすぎるといわゆる「白飛び」してガラスの色を表現できない。

パイプオルガンにスポットライトを当ててもらう。少しずつ移動しながらカメラを構える。

撮影ポイントを確定すると露出計と数枚のフィルターを取り出す。
「皆さん、しばらく、そのままで」
構図を確かめてフィルターを選ぶ。キャンドルを生かすために彫りの浅いクロスフィルターをレンズに装着する。当日の光加減が変わっても対応できるよう測光値をメモする。
今回の仕事はレコードのジャケット作り。信者でプロのオルガン奏者の音源をレコード化し、その売上を恵まれない人々に寄付するという。そのジャケット作りにモリ・ＰＲ・コーポレーションが協賛することになった。安月給の社員――俺を使って低料金で仕事を請け負っていい顔をするのだ。でもあくまでも商売だ。
やがてオルガン奏者が現れる。すぐリハーサルが始まる。シャッターを全押しする。モータードライブ音が心地よい。本番さながらの雰囲気の中でコツをつかむ。

＊

車に商売道具を積み込んでいると西海（ニシウミ）が近づいてくる。礼拝堂では気付かなかったが黒い服がよく似合う。
「御苦労様でした」
「リハーサルまでしていただいてありがとうございました」
なんて一歩下がった返事をした。この日、この教会を下った海に近い神戸学生会館で守（モリ）はリーダーを務めるバンドの解散公演があるのでこの仕事を俺に任せた。

「アマチュア無線？」
ドアを開けたままエンジンをかけると西海がバンパーに取り付けた長いアンテナに気付く。
「兄もしてるんです」
親近感を持つ。どこかで彼女のお兄さんと交信しているかもしれない。アマチュア無線家とはそう言うものだ。自然と助手席のロックを外す。
「お茶でも飲みませんか」
「そういえば、お茶も出さずに失礼しました」
意外にもドアを開けて乗り込んでくる。
「学生？」と、俺。
「公務員です」と、彼女。
ショートカットでミサのためか化粧らしい化粧をしていない。十人並みの顔をした小太りの女子。どちらかと言えば子供っぽい。とても働いているようには見えない。
坂道を下る。時計を見る。守（モリ）バンドの演奏は午後からなので少し余裕がある。
「いつ、洗礼、受けたん？」
「幼稚園のとき」
「へー。バリバリのクリスチャンやんか」
最初に見つけた喫茶店の駐車場に車を入れる。

「こちらにはよく来られるんですか？」
「うん。大学がこっちやから」
「えっ、学生さん？」
「一応」
不思議そうに俺を見ながら一緒に店に入る。
「夜間？」
「高校は夜間やったけど」
確認せずにコーヒーをふたつ注文する。余程興味を持ったのか遠慮なしに尋ねてくる。
「どちらの大学ですか？」
「神大」
「えー。定時制高校から！　すごいわ」
感心するように俺を見上げる。そのせいか言葉が雑になる。
「うん、まあね。定時制から全日制の三年生に編入して受験した。一浪したんと同じや」
「えっ！」と、先程より強く驚く。
コーヒーが運ばれてきた。角砂糖をひとつ摘まむと半ばポカーンとしている西海のカップに運ぶ。
「ひとつで、いい？」

「はい……あ、すいません……大学と仕事、大変でしょ？」
「大した事あれへん。神大には夜間課程があって昼間と同じ講義をしてるから、夜の講義聴いて昼間仕事するんや」
「すごい！」
　ますます得意になって苦いのは苦手なのに格好をつけるためブラックで飲む。距離が縮まったからか彼女も関西弁になる。
「この仕事、いつからしてはるんですか？」
「高一から。全日制に編入させてもらった四年目は会社にわがまま言ってよく休んだけど」
　西海はコーヒーを飲むのも忘れて話に引き込まれる。俺も有頂天になって時間が過ぎるのを忘れた。会話に穴が開いたとき西海は壁の時計を見て腰を浮かす。
「あっ！　そろそろ戻らないと……」
「俺も、もう一仕事あるんや。送る」
　伝票を持ってカウンターに向かう。支払いを済ませると西海が頭を下げて待っていた。
「すいません。財布、バッグと一緒に教会に置いてきてしまって……」
「かまへん、かまへん」
　腰に手を回して一緒に車に向かう。
「今度、奢ってくれたらエエやんか」

返事を失う西海を横目で見ながら車に乗り込む。これと言って魅力を感じないけれど純なところに引かれる。

「クリスマス・イブが本番。仕事、終わったら会いたいなあ」

「えっ……はい」

はにかみながら答える。

教会にはすぐ着いた。守（モリ）のコンサートの事が頭にあって飛ばしたからだ。降りる西海の背中に声を掛ける。

「じゃ、今度、コーヒー、奢ってな」

振り向く笑顔の西海……知秋が手を振っている。

＊

神戸学生会館には十一時半過ぎに着いた。守（モリ）バンドは「取（ト）り」。公演は十三時から。駐車場に車を止めて充実感と共に撮影機材を後部座席から降ろして受付へ。

充実感――そう、初対面の女心をわずかな時間で掴んだという独りよがりの満足感に酔っていた。つまり柄にもなくプレイボーイ気取りになっていた。自然と顔がほころびる。それにしてもと受付に向かいながら、ふと美英子を思い出す。美英子が西海みたいに純な女子だったら……

この夏、北海道から帰阪した次の日に電話があった。それは「アリガト」から始まったけれ

ど、車内に置き忘れた化粧ケースをどう返すかで揉めた。
「手渡す」と言ったが「郵送して」と言う。「手渡しでないと返したらへん」と強気に出ても「エエもん。新品、買うもんね」ときた。「あんまり化粧せーへんのに新品買うんか？」と再度強気で押しても「ほっといて。気に入ったの見つけたん。金に糸目つけへん」
仕方なく住所を訊(キ)いて郵送した。しかも書留で。それなのに何も言ってこない。こちらから電話しようにも番号がわからない。守経由(モリ)で上町(ウエマチ)から番号を聞き出す手もあるがアホみたいやし、俺にもプライドがある。
――だいたい女が化粧ケースを忘れるなんて……えっ！
何と目の前に美英子が！　受付のテーブルを回って近付いてくる。急に緊張する。
「化粧ケース、アリガト。何、してたん？　遅刻やんか。でも機嫌、良さそうやね」
ふかふかした卵色の暖かそうなセーターに紫色のミニスカート。そして黒いストッキングに小さな靴。ほとんど化粧していないのにほんのり上気した赤い頬と稚児(チゴ)のような赤い唇で見つめるけれど少し疲れ気味の感じ。なぜか香水の匂いがきつい。
「悪気で返事せーへんかったんと違うん……ごめん。ごめんなさい」
調子がおかしい。顔を上げない。
「どうでもエエわ」と、楽屋に向かう。
「チケットは？」

後ろから腕を取る。前に回ると目を丸く見開いて通せんぼする。
「謝ったのに許してくれへんのやったら、入れたげへん」
「アホなこと言うな。通せ！」
「イヤ」
「俺は超特別関係者や」
「撮影係」の腕章を見せるが、手首を掴んでそんな事は百も承知という視線で俺を縛る。
「怒ってるんや……」
「当たり前やろ！」
突然、美英子の表情がマイナスに向かう。
「ウチ、どうしたらいいん？」
――アホな事、訊(キ)くな！
手を振りほどこうとするとさらに強く握ってくる。撮影の段取りはもちろん昼飯を喰いたい。
「わかった。わかった。許す。許したるて」
急にニコッと笑って手を離す。
「ウチの事、怒らんと優しくして」
カメラバッグと三脚を抱えたまま振り返る。
――優しくして欲しいのはこっちの方や

しかし、優しい津波なんかあるはずがない。油断は禁物。
「ごめんね」
この柔和な言葉で重大な事に気付く。
「なんで、ここに居るんや！！」
「あれー、聞いてへんの？」
「何を」
「上町（ウエマチ）さんが守（モリ）君に頼まれたん。ウチと下村（シモムラ）さんは下請けよ」
「ふたりは？」
「楽屋。楽屋って滅多に見られへんやんか。開演したら暇やから交代でのぞき見してるん……」
一気に喋る美英子にしては珍しく一呼吸置く。少し前から美英子節が消滅している。
「ウチ、先にのぞき見したけど……」
今まで見た事のない真剣な表情をする。
「色々、あるんよね。楽屋って……」
確かに素人は舞台裏を見ない方がいい。興ざめするだけ。黙ったまま楽屋に向かおうとすると上町と下村が戻ってくる。
「交代しよ。もう一辺、見てくる」
美英子は二人にはばかることなく俺の腕を取ると一緒に楽屋に向かう。途中、数字を書いた

メモをくれる。
「ウチの電話番号。気が向いたら掛けて」
――チャンスが巡ってきた？　でも何かおかしい

＊

午前の部は終了して幕が下りた。舞台の模様替えが始まる。後半は守（モリ）バンドの最終公演。
守（モリ）はピアノとシンセサイザーを担当するが、アマチュア無線、と言ってもプロ級だが、要するに電気好きの彼はプリアンプに様々な仕掛けをして奇抜な音色を操る。
並のバンドと異なるのは規模と編成だ。ドラム、ベース、ギター、チェンバロ、ティンパニー、フルート、ハープ、チェロ、バイオリンと多彩な楽器を駆使する十数人編成で、フルート、ハープ、チェロ、バイオリン奏者は短大や女子大の学生で、色を添えて観客を楽しませる。
バイオリンは三人の女子大生が受け持つが、プロ並みの南野春夜（ミナミノハルヨ）が独奏するときは必ず守（モリ）がピアノを弾く。この息の合った演奏も素晴らしいが、ロックとジャズとクラシックを融合させたスケールの大きな演奏を得意とする。
レパートリーはすべて守（モリ）と春夜のオリジナル曲で十数曲と少ないけれど、一曲の演奏時間が長いので十分ワン・コンサートをこなせる。
音合わせが始まる。守（モリ）バンドのコンサートの時は必ず俺が撮影係として同行する。当然照明スタッフと打合わせをする。このホールの場合、舞台に向かって両サイドのスタッフは一人ず

つ。真後ろの照明室兼映写室はそれなりに広く二人。
打合せを終えると演奏が始まるまで二十分ほどある。スタッフが会館内の食堂に出掛けた。快く留守番を引き受けると舞台を睨む。撮影はその場限りなので失敗が許されない。
そのとき前ぶれもなく美英子が入ってくる。
「昼、食べてへんのと違う？　良かったら、これ食べて」
意外な事におにぎりを差し入れてくれた。
「ありがとう。助かる……」
――なんでここにいる事、知ってるんや？
開いたドアから漏れる光だけでは表情がよく分からない。
「あっ、お茶、忘れた」
俺がおにぎりを頬張（ホオバ）ると急いで出て行った。滅茶苦茶うれしかったけどすぐ露出計との格闘を始める。
ホール内はうす暗い。照明室も足元を照らす電球が数個あるだけで暗闇に近い。再びドアが開く。廊下からの光の侵入で部屋が明るくなる。声がけがないので光を確認する。シルエットはひとつ。
「お茶、持って来たんか？」
返事はない。美英子と同じようにスラッとしているが背が高い。逆光のシルエットからは俺

の顔や姿がはっきり見えるはず。摩周湖と同じ声がする。
「ごめんなさい……マモル」
夏子だ！　よく見えない。あの時と同じで身体が動かない。露出計を持つ俺の手を取る。
――縒(ヨ)りを戻したい？
摩周湖の時は殴りたい衝動に駆られたが、今度は違う。
――抱きしめたら、どうする？
「今でも……」
うわずった夏子の声がする。手を振りほどいて逆に握り返して前に出る。露出計が落ちる音と同時にスタッフの声がする。
「すいません。遅くなりました」
一瞬のうちに夏子が蒸発した。スタッフを押しのけて照明室を出たが姿はなかった。
――幻？
なぜならスタッフがこれと言った反応をしなかったから。
摩周湖では白いベール。ここでは暗いベール。いずれも声だけで顔はなかった。
「世間は狭いから……何時、何処で会うかも知れない。でも、そのときは赤の他人」
釘を刺して俺の前から消えた夏子。それなのに二度も現れた。去った相手を未練がましく追いかけることはよくあるが真逆だ。再会を前提にして別れるなんてあり得ない。

――釘を抜きに来た？　まさか、まだ俺の事を……
そう思った時、不意に後ろから肩を叩かれる。守（モリ）だ。
「ご苦労さん。これ読んどいてくれ」と、封筒を押し付ける。
「こんなところでブラブラしてて大丈夫か」
不自然な苦笑いを残して姿を消す。もちろん舞台に向かったはず。
俺は封筒を尻のポケットに入れてホールに向かう。ブザーが鳴る。舞台前のカメラマン席に陣取ってあらかじめ設置しておいた三脚にカメラを固定する。

＊

熱狂的なアンコールが終わって場内が明るくなると、どよめきが広がる。しばらくすると出口が騒がしくなる。カメラや三脚を片づけて受付に向かう。
「感動したなあ」
「メジャーデビューすればいいのに」
「あっ、写真集！」
ファンで混み合う。守（モリ）バンドの人気が如何に高いのか、改めて驚く。美英子や上町、下村が忙しそうに写真集を売りさばいている。その後ろで山積みされた写真集を手にする。
「ポート・バイ・マモル・フタセ」と写真集の裏に印刷されていた。守（モリ）からは限定数ながら無料で配ると言われていた写真集。俺は驚いた。尻のポケットから封筒を取り出して封を切る。

「最後のコンサートなのでパーティをする。二世(フタセ)にも来て欲しいが……」
走り書きの最後にはこう書いてあった。
「写真集の儲けは二世のモノ。長い間世話になったお礼だ。受け取って欲しい」
――守(モリ)のヤツ……
うれしくはなかった。何故なら、このやり方は作為的だ。前もって言えばいい話だ。俺が断るのを見越しての事だろうか……うれしくはなかった。何故なら親友じゃないか。先に一言あってしかるべきだ。
パーティの撮影は俺の仕事ではないしバンドのメンバーでもないから、地下駐車場に向かい機材を積み込むと会社に戻る。まず最終公演の写真の現像に取りかかる。ほぼ思ったとおりの撮影ができていた。暗室を出ると急に夏子の顔が浮かぶ。
――なんで学生会館に？